

国際光年総括シンポジウム～光の科学と技術の新たな飛翔に向けて～
開会挨拶

主 催： 日本学術会議総合工学委員会 IC0 分科会
共 催： 国際光年協議会
国立研究開発法人 科学技術振興機構

2015 年 12 月 11 日(金)
東京大学安田講堂
日本学術会議会長 大西隆

国際光年総括シンポジウム～光の科学と技術の新たな飛翔に向けて～が開催されるに当たって、主催者である日本学術会議を代表して、ご参集の皆様にお礼を申し上げます。

今年の4月に開催されたキックオフイベントの折にも、ご挨拶をさせていただきましたが、その時以上に多数の皆さんのご参加によって、1年間の国連のイベントの締めくくりが行われることは大変喜ばしいことです。日本の国際光年を推進してこられた IC0 (国際光学委員会) 会長の荒川泰彦先生をはじめとする光年を牽引してこられた皆様のご尽力に敬意を表するとともに、感謝申し上げます。

11月に、World Science Forum というイベントがあって、ハンガリーに参りましたが、その折にも、IYL2015の記念イベントが開催されており、今年は世界各地で“ひかり”に関する科学のイベントが行われていることを実感しました。

日本における1年間の光科学・技術に関する一連のイベントが、若い方々の光への関心を高め、日本における光科学の発展と技術への応用の進展に結びつき、本日も講演をお願いしている赤崎勇先生、安藤忠雄先生、村山斉先生のご業績を目指すような研究が多数行われていくことになれば、学術振興の観点からも光年の意義があったということになります。

ところで、現在、私ども日本学術会議がもっとも力を入れて取り組んでいることのひとつが、高等教育に対する国の支援をより高い水準に引き上げて、科学技術が産業を創り出すサイクルをより確かなものとしたり、若い人々が科学に身を捧げて成果を上げ、夢を実現できる環境を整えることです。

わが国は、科学技術の研究や応用に力を入れているように思われていますが、その実、OECDの統計によれば高等教育に対する公財政支出は0.5%で、OECD諸国のほぼ最下位です。また、大学進学率も、最下位ではありませんが、下から数えた方がずっと早い水準です。こうした状態が続けば、将来の日本の科学技術水準、あるいはそれをベースとした産業力は極めて見通しの暗いものとなります。

もちろん、少子化の中で、高齢社会を迎え、高齢者に安心した老後を送ってもらうための公財政支出が重要なことは言うまでもありません。何とか頑張って、高齢者と未来社会を担う若者への公的な支援を両立させなければわが国の展望が開けません。

私は、そのために日本の大学が思い切った国際化を進め、大学こそが、日本の新たな展望を開く場所であることを自ら示すことが不可欠と思います。先般、ある著名な経済人に日本の大学への思いを伺ったところ、特に国立大学、中でも有力な国立大学はもう国内での競争を考えるのではなく、世界の諸大学の中に自らを置いて、競い合うようにしなければ駄目だと指摘していました。考えてみれば、日本のトップの企業は、大半の売り上げを海外で上げている場合も少なくありません。1.2億人の人口規模といっても73億人を超える世界の人口から見れば2%に満たないのですから、国際的な企業になるには、国内市場だけを相手にしては話にならない状態がずっと昔からやって来ていて、企業はいち早くグローバル化してきました。しかし、日本の大学は、現在でもなお、国内の優秀な若者を教育することをもっぱらの役割としている状態が続いているのではないのでしょうか。

世界のもっとも可能性のある若者を集めて、教育して、彼らに将来の日本を作ってもらおうといった積極的な取組がいまこそ求められているよう思います。

こうして国際光年で世界が光を考える1年を過ごしたことを機会に、光の分野、そしてあらゆる科学の分野で、日本の学術や高等教育のさらなる国際的な展開が進むことを期待したいと思います。

その意味では、今回のイベントも締めくくりというよりは、新たなチャレンジに向かったのキックオフという意味を持つべきかと思います。

是非皆さんの力で、新たな活動を進めていただきたいと思います。